Verhoeff 博士小傳

三　好　保　徳

松山市松山北高等學校

今年の2月頃，私は高桑良興博士の委囑をうけて München の Verhoeff 博士へハガキを出した。戰爭中から高桑博士は，消息不明になつた Verhoeff 博士のことをたえず心配していられた。もう高齢のことだからあるいは生きてはいられないかもわからない，と申されていたこともあつたように記憶している。そのようなわけで，たとえ便りをしても返信が得られるかどうかは全くあても無いことなのであつた。ところが意外に早く，しかも航空便で返信があつた (1950. 5. 7)，といつて高桑博士は早速そのことを私にも知らして下さつた。けれどもそれは Verhoeff 博士からではなく，博士の令孃からのものであつたのである。高桑博士が心配していられた通り，まことにそれは悲しいことであつたけれども，Verhoeff 博士は既に5年も前に世を去つていられた。この度の手紙の中には "Naturwissenschaflichen Rundschau" (Heft 1, Januar 1949) の41ページから42ページにかけて公にされた Verhoeff 博士の小傳が同封されていたので，高桑博士もはじめて今日彼の履歴をお知りになつたということである。幸い私もその傳記を讀む機會を高桑博士によつてあたえられたので，次にこの大多足類學者の風貌をその飜譯によつて紹介しようと思う。

1945年12月6日，München の郊外 Pasing において自然科學が稀に示し得るような大成功を見せた1人の研究家の生命がその悲しい終りをつげた。Verhoeff 博士は彼の78回目の誕生日をむかえて後，間もなく永久にその眼を閉じたのである。

Karl Wilhelm Verhoeff は1867年11月25日 Westfalen の Soest に生れた。そして1889年，Bonn 大學へ入り，最初醫學の研究につくしたがやがて生物學に轉向した。彼は主として，Myriopoden 及び Isopoden の研究家として知られているけれども，彼が動物學において最初に手をつけた研究と論文はこれらに關するものでは無くむしろ昆虫に關するものでつた。彼が Rhynchoten について學位論文を書いた時に彼は既に昆虫に關する37の學術輪文を公にしていた。昆虫腹部の比較形態學，胸部に關する研究，有氣管動物の步肢に關する研究等は，彼の青年時代の仕事である。

けれども既に1890年に彼は有名な Handbuch (の中にあるオーストリヤ＝ハンガリーの多足類) の中で倍足類の近代的研究の基礎をつくつた多足類の碩學 Rudolf Latzel と文通していた。そしてこの倍足類がつよく彼の心をひきつけてやまなかつた。

學位を得てからの Verhoeff は數年間 Berlin 博物館で助手をつとめた。けれども當時すでに新しい研究の方向にうごいていた彼の活動的衝動と努力とはこの從屬的な地位と調和することが出來ず，間もなく在野の學者として專ら自己の研究に專念したいために，彼はあらゆるそくばくを絕つに至つた。これは彼の經濟的狀態がこうすることを可能にしたのであつたが，彼はこの決心が後になつてひどく困難な狀態になつた時でも自らえらんだこの道を少しも後悔する事はなかつた。彼は自己の全生涯をこの研究にうちこみ，その住居をも研究に最も都合のよいところにえらんだ。Bonn から Berlin に，ついで Dresden へ移つたのだがそこも都合がわるくて永くは住まなかつた。というのはアルプスこそ彼の最もよい研究場であることを知つたからであり，そのため第1次世界大戰の少し前に München の近郊，Pasing へ彼の安住の地を定めたのであつた。

Verhoeff はたゆみ無き研究者であつた。彼は自身の研究に用いた動物の大部分を，晩年にいたる迄つずけられた數かぎりない採集旅行によつて自ら集めたばかりでなく（このことがめつたにあり得ることではないのだが），1日の殆んどの時間を彼の研究室で机に向つて學術研鑽にしたがうとともに，尙余暇を見出しては家の中や庭ではたらき又自ら耕作した。この調和ある生活のおかげで彼は高齢に至る迄おどろくべき健康をかち得たのである。

彼が好み選んだ領域，即ち Diplopoden の領域における彼の生涯研究の價値を認めようとする人は，彼がその研究をはじめた時代の狀況を一考せねばならない。彼の研究開始の少し前に Latzel が生殖肢（Gonopoden）のもつ基礎的な分類學的意義を指摘していた。しかしそれは暗示以上のものではなかつた。というのはこの方面において次の半世紀の間になされた研究は何といつても Verhoeff のたゆまざる研究の成果であつて，彼は數十年にわたる困難な研究によりこの器官の比較形態學を明らかにし，これによつて確固たる基礎を得たのである。この基礎によつて彼は，その後時のたつにつれて豫想以上に多く發見された種類を，彼の厖大な Diplopoden に關する論文の中に表われている明確な分類學的体系の中に整理することが出來たのである。

今日の意味においての節足動物の動物地理學については19世紀の終り頃までには，なにも論じられてはいなかつた。この學問に對して極端に定着性をもつ Diplopoden がすぐれた意義をもつことを認めたのは Verhoeff の創見である。この方面に關する研究の機會は彼が行つた毎年およそ2回，春と秋とのそれぞれ 4—6 週間にわたる採集旅行によつて得られたものである。採集旅行はなかんづくアルプスの全域にわたつて，又カルパチヤ山脈にあるいはバルカンの諸山脈からギリシヤに及んで行われ，イタリヤへは21回も行つているのである。

もちろん Latzel の Diplopoden の發生及びその發生形態についての知識は極めて微々たるものであつた。 Verhoeff こそ最初のそして殆ど唯1人の人として實施した數多くの飼育觀察によつてこの方面の事情に光明をもたらした人であつて，彼はこれにより單に分類學上價値ある新しい觀点を見出したばかりでなく，不可思議きわまる自然狀態における發生過程についてもその事情を明らかにしたのである。即ち Verhoeff の Periodomorphose（くりかえし變態）の大發見である。 種々な多足類が成熟期に達し且生殖した後にも



高　桑　博　士



フェルヘフ博士

死なないで（死ぬるのが一般だが），脫皮によつて再び幼蟲狀態にかえり，長い休眠の後新しく性的成熟に達するということ，しかもこれは同一の動物において4回もくりかえされるという過程で，かゝる能力を發見したことである。もとよりこのくらべものもない發見は,熟した果實として彼の手に入つたのではなく，數十年にわたつて， Doppelmännchen, Schaltmännchen の概念は一貫して彼の論文をつらぬき1920年代においてこの驚くべき發生の經過を完璧に證明することが出來たのである。

彼によつて記載された約2000の新種は彼の大なる成功の基礎をなした數多くの研究を證明している。 Diplopoden についてだけでも彼は200の論著をドイツ又は外國において公表している。そして最後期の幾册かの論文はまだ印刷中である。

彼の研究の中で最大のものは Bronns の Tierreich にかゝれた Diplopoden の研究(1926-32) である。これは2000頁をこえる記念すべき仕事である。 これにつずいて Chilopoden 及び Isopoden についても同樣な仕事がなされた。

彼の研究は常にたえざる努力と，鋭い觀察力と，大所的關係を認識する才能とを示している。したがつて新屬新種等の記載にあたつても單に採集日とかその特徴の記述にとどまらず既知の事實と新らしく知られた認識とを比較しそれを關係づけようと努力している。

プロシヤ科學アカデミーからライプニッツ賞の授與されて彼の仕事の價値が認められ,又死ぬ少し前ボン大學の名譽博士號がおくられたことは一層彼をよろこばせた。

ところでこの科學界の鬪士の外部的生活はどのような經過をたどつて行つたことであろうか。家にいて物質的な生活に心配なく研究をつずけることは長くはゆるされなかつた。第1次世界大戰後彼は殆んど無一物となつて，彼の研究により糊口の資を得なければならなくなつた。如何に彼がそのために苦んだかはその間の事情に通ずる者のよく知つているところである。數年間はドイツ育英會から補助金を得て研究旅行をしたが，これも長くはつずかなかつた。その上彼の晩年10年間には，困難な運命の打擊がつぎつぎに彼をおそつた。先ず顯微鏡をのぞく眼が不治の病にかかつたことである。このため彼の研究は困難をきわめた。次に35年間生活をともにした夫人に先だたれ，遂には令息をロシヤの戰場で失つてしまつた。それにもかかわらず彼は失望しなかつた。彼の研究は彼にとつては自然に對する敬虔と愛情の奉仕であつた。あらゆる運命の打擊，あらゆる困難にもかかわらず，研究が彼をふるい立たせたのである。爆彈が彼の家を破碎し，彼から研究の可能性をうばつた時にはじめて彼の生きんとする意志も破壞された。しかしよろこばしいことは彼の學術上の無限の價値ある蒐集物と多くの論著が尙殘されたことである。自然科學の偉大なる先驅者としての彼の名は Diplopoden, Chilopoden, Isopoden の研究史上に消えることなく殘るであろう。 (Karl Strasser, Triest.)

尙この傳記にそえてあつた Verhoeff 博士令孃の手紙をもそえておくならば次のようである。

München-Pasing, 15. 4. 50

尊敬する高桑樣

私の最愛の父が1945年12月6日に永眠いたしました事をお傳えせねばなりませんのはまことに遺憾なことでございます。私は父から貴方樣のことをいろいろ聞いていますし，又1939年に父にお贈り下さいました美しい日本のショールを今でも大切にもつています。貴方樣が大きな御被害もなく戰爭にたえられましたことをよろこび，そして御機嫌よくお暮らしなさいますことをお祈り致します。

かしこ

Mathilde Verhoeff

Verhoeff, 高桑兩博士の寫眞から私が模寫したのを本記事中に揭げ東西兩多足類學者の溫容を仰ぐことにしたい。